

いかにして高次の世界を認識するか ルドルフ・シュタイナー

第三版に寄せる序文（一九〇九年）

いかにして高次の世界を認識するか 1

条件 1

内面の平成 10

▼ 秘技参入の諸段階 19

1 準備 19

2 揭示 26

思考と感情の制御 29

▼ 秘技参人 40

▼ 実践的な観点 50

▼ 神秘学の訓練のための条件 59

▼ 秘儀参入のいくつかの作用について 68

▼ 神秘学の学徒の夢の生活に現れる変化 96

▼ 意識の持続性の獲得 102

▼ 神秘学の訓練に伴う人格の分裂 109

▼ 境域の守護者 117

▼ 生と死―境域の大守護者 124

あとがき 131

筆者がこれまで「いかにして高次の世界を認識するか」という題名のもとに個別に発表してきた文章を、今回、本にまとめて出版することになりました。とりあえず、本書にはその第一部が収録されることになります。第二部は、本書の続編に収められる予定です。

人間が超感覚的な世界の認識をめざして発達していく過程について記述した文章が、今回、新たな形で刊行されるにあたって、筆者としては、最初にいくつかの導入のための言葉を書き記しておきたいと思います。

筆者は、本書に収録されている人間の魂の発達に関する記述をとおして、さまざまな人びとの要求にこたえることをめざしています。まず第一に筆者は、「自分は人生の高次の謎に関する問題について語ることができる」と主張する人びとは、そのような知識をどこから得たのか」という疑問を抱く人に、何らかの答えを提供しようと考えています。霊学（精神科学）はこのような謎について、ある事柄を語ります。このような事柄のもとになっている事実を観察しようとする人は、超感覚的な認識を身につけなくてはなりません。その人は、筆者が本書のなかで記述することを試みている道を、みずから歩まなくてはなりません。とはいっても、この「霊学に関して伝えら

れる事柄は、このような道を自分で歩みたいと思っていない人や、このような道を歩む可能性がない人にとって「価値がない」と考えるのは誤りです。確かに事実を探究するためには、私たちは超感覚的な世界に参入する能力を自分で身につける必要があります。しかし霊学の研究者が超感覚的な事実を探究し、それについて語るときには、自分では超感覚的な事柄を知覚できない人でも、霊学に関して語られている事柄は真実である、という十分な確信を抱くことができるのです。とらわれない態度で健全な判断力を働かせれば、私たちは、霊学の研究者が語る事柄の大部分が真実かどうかを確かめることができます。このようなとらわれない態度を貫くためには、私たちは、人生のなかに無数に存在しているさまざまな偏見や先入観によって妨害されないようにしなくてはなりません。

たとえばある人が、霊学の研究者が語る事柄は現代科学のある種の成果と食い違っている、と考える可能性はおおいにあります。実際には、霊的な研究と矛盾するような科学的な成果は存在しません。しかしとらわれない普遍的な見地から、科学的な成果について調べてみようとしないうときには、私たちは、特定の科学的な見解が高次の世界に関する事柄と一致していない、と容易に信じ込んでしまうのです。偏見を抱かないで、霊学と実証的な科学の成果を結びつけようとするとき、私たちは、霊学と科学は一致しているという事実をいっそう明確に認識できるようになります。

霊学で教えられるそのほかの事柄に関しては、私たちはそれを（程度の差はあっても）悟性的な思考のみをよりどころとしてとらえることはできません。しかしながら、人間は悟性をとおして思考するだけではなく健全な感情をとおして真理をとらえることもできる、ということを理解するならば、私たちにあって、このような事柄と正しい形で関わるのはむしろかしいことではなくなります。私たちの感情が、特定の事柄に対する共感や反感によって駆り立てられることなく、とらわれない態度で超感覚的な認識を受け入れるようになると、私たちは感情をとおして適切な判断をすることができるようになります。

超感覚的な世界に到る道に足を踏み入れることができない（あるいは足を踏み入れるつもりがない）人びとに、霊学的な認識が正しいことを証明する方法は、ほかにもたくさんあります。にもかかわらず、このような人びとは、「もし霊の研究者の語ることをとおしてしか霊学的な認識について知ることができないのだとしたら、このような認識は人生にとって何の価値があるのか」と感じるかもしれません。確かにすべての人が、一瞬のうちに霊視者になれるわけではありません。しかし霊視者が伝える認識は、すべての人間にとって、健全で正しい人生の栄養になります。なぜならすべての人間は、このような認識を人生において実際に応用することができからです。実際に応用してみると、私たちは、「霊視者が伝える認識を受け入れると、人生のあらゆる領域が変化する。また、このような認識が欠けていると、人生からさまざま

まなものが失われることになる」ということをすぐに理解します。人生のなかで正しい形で応用してみると、超感覚的な世界の認識は実際の役に立たないどころか、むしろ最高の意味において実践的なものであることがわかるのです。

一方、みずから高次の認識の道に足を踏み入れようとしないで、霊視者が語る事実について学ぶことを好む人ならば、「霊視者はどのようなにしてこのような事実にとどりついたのだろうか」という疑問を抱くかもしれません。筆者は本書をとおして、このような疑問を抱く人のために、超感覚的な世界を実際に認識するためには何を行わなくてはならないか、ということに関するイメージを提供したいと考えています。超感覚的な世界に到る道を自分では歩まない人でも、このような道をすでに歩んだ人が語る事柄に信頼を寄せることができるように、筆者は超感覚的な世界に到達する方法について記述するつもりです。霊の探究者が実際に行っていることについて知ると、私たちは、それは正しいものであると認めた上で、「高次の世界に到る道に関する記述を読むと、私は、霊視者が語る事実がなぜ納得のいくもののように思われるのかがわかるような気がしてくる」という実感を抱くようになります。本書が超感覚的なものに関する真理の感覚と真理の感情を強め、確実なものにしたいと思っている人びとの役に立つことを、筆者は願っています。また筆者は本書をとおして、超感覚的な認識への道を自分自身で探究しようとする人にも、価値のあるものを

提供したいと考えています。自分自身の内面において真理を実現することによって、私たちは、本書で述べられている事柄は真実である、ということを経験する方法で確かめることができます。このように自分自身のなかに真理を実現しようとするときには、次のような事実をいつも念頭に置くようにして下さい。すなわち、魂の発達について書かれた書物を読む際には、ほかのジャンルの本に書かれている事柄を知識として知ろうとする場合よりも、多くのことが求められるのです。私たちは、本書に書かれている事柄のなかに心をこめて深く入っていく、本書の記述そのもののなかで生きなくてはなりません。この場合、私たちは次のような前提に立たなくてはなりません。すなわち私たちは、一つの事柄について理解しようとするときには、その事柄自体に関する記述だけではなく、まったく別の事柄に関する多くの記述もよく読まなくてはならないのです。このようにして私たちは、「重要なことは一つ、真理のなかに存在しているのではなく、あらゆる真理の調和のなかに存在している」ということを理解するようになります。

霊的な訓練を実践しようとする人は、以上のような点によく注意をはらって下さい。私たちはある一つの訓練を正しく理解したとき、ようやく正しい方法で実際の訓練に取り組むことができるようになります。しかし訓練を実践する人が、最初の訓練の面的な偏りを脱して魂の調和に到達することができるよう、さらに別の訓練を行うようにしないと、最初に行った訓練が正しい影響

を及ぼさなくなることがあります。

読書そのものが内面的な体験となるように心をこめて本書を読むならば、私たちは本書の内容を知識として身につけるだけではなく、いくつもの箇所を読むたびに、さまざまな感情を抱くようになります。そしてそのことによって私たちは、このような感情が魂の発達にとって重要な意味をもっていることに気づきます。また同時に私たちは、自分自身の人格にあわせてどのような形で訓練を試みるべきか、ということも理解します。以上のよみに、体験すべき事柄に関する記述の本質に目を向けてみると、私たちは、訓練を続けているあいだも、繰り返し本書の内容に立ち戻らなくてはならないことを知ります。そのとき私たちは、「さまざまな試みを行ったあとで、以前は見落としていた本書の微妙な部分に気づくとき、私たちはようやく、自分の力で、多くの事柄を十分に理解することができるようになる」という確信を抱くのです。

また、本書で示されている訓練を実践することは考えていない読者の方も、本書のなかに、内面的な生活に役立つ多くの事柄（たとえば人生を支配する謎のように思われるさまざまな事柄がどのようにして明らかになるかということについての示唆など）を見出すことができるはずです。

さらに、さまざまな人生の経験をしてきた人（つまり多くの点において人生の秘儀参入を体験した人）も、本書全体の意味のつながりのなかで、いままで一つひとつばらばらに考えてきた事柄や、知ってはいても十分に理解す

ることができないでいた事柄について解明されているのを知って、満足を感じることでしよう。

第五版に寄せる序文（一九一四年）

今回「いかにして高次の世界を認識するか」の新版を刊行するにあたって、私は十年以上も前に書いた文章に、細部にわたって手を加えました。私は本書に書かれている魂的な体験や魂的な道に関する記述を書き改める必要を感じました。本書の記述に含まれているのは、私の魂とずっと親密に結びつき、私の魂にたえず作用を及ぼしてきたような内容だけです。今回の改訂に際して、このような筆者の魂の活動と、何年も前に書いたことをいっそう明確でわかりやすいものにしようとする努力がおのずと結びつくことになりました。このような努力を続けることによって、この改訂版は生まれました。今回の改訂版では、重要な説明が含まれている箇所や、主要な事柄はすべて、いままでの版と同じ形で残しておきました。が、その一方で、私はいくつかの重要な変更をほどこしました。私は、個々の部分をより正確に記述するために、多くの箇所 hands に手を加えました。私は、このような変更をほどこすことは重要である、と考えました。本書に書かれている内容を自分自身の霊的な生活のなかで実際に応用しようとする人は、本書で説明されている魂的な道の性格をできる限り正確にとらえなくてはなりません。こ

のような内面的な靈的な事象に関する説明は、物質的な世界の事象に関する記述よりも、はるかに誤解されやすい傾向があります。このような誤解が生じるのは、たえず変化し続ける魂の生活は物質的な世界の生活とは異なっている、ということとを、私たちはつい忘れがちになるからです。今回改訂版を出すにあたって、私はこのような誤解の生じやすい箇所を注意深く見つけ出して、誤解が生じないように文章を書き改めました。

本書に収められている文章を初めて書いたとき、私は多くの箇所を、現在とは異なった形で記述しなくてはなりませんでした。私は当時、この十年間に靈的な世界の認識と結びついた事実について公開してきた内容を、公開後の現在とは別の形で語らなくてはならなかったのです。私はこの十年間に、『神秘学概論』や、『人間と人類の靈的な導き』や、『人間の自己認識への道』や、とりわけ『靈的な世界の境域』や、そのほかの著書のなかで、靈的な事象について記述してきました。私はすでに十年以上も前に、本書をおしてこのような靈的な事象について記述したのですが、それは、私が現在正しいと思っているような言葉とは別の種類の言葉で語られていたのです。その頃私は、本書のなかにまだ記述されていなかった事柄については、「それに関しては口頭による伝達」をおしてのみ教えることができます」といわなくてはなりませんでしたが、現在では、当時は口頭でしか伝えることができなかった事柄のうち、すでに多くが公開されています。

にもかかわらず読者の方のなかには、現在でもなお、重要な事柄は口頭のみをおして伝えられる、という誤った考え方を完全に捨て去ることができない人がいます。そのような人は、靈的な訓練を求めて努力する人と特定の師との個人的な関係を、実際に以上に重要視しています。私はこの新しい版において、細部の言葉の遣い方に配慮することによって、「現代という時代の靈的な条件のもとでは、靈的な訓練を求める人にとっては、師と個人的な関係を築くことよりも、客観的な靈的な世界と直接関わりあうことのほうがはるかに重要な意味をもっている」という事実をより鮮明にすることができた、と考えています。これからの時代においては、靈的な訓練の師は、助言者としての役割のみをはたすようになるでしょう。このような師の役割は、新しい知識を伝えるために、そのほかの学問分野の教師がはたしている役割と同じなのです。私は本書のなかで、「靈的な修業における師の権威と師に対する信頼は、そのほかの学問や人生の領域における教師の権威や教師への信頼と同じ役割をはたすべきである」ということを十分に示すことができたと信じています。私は、「靈の探求者と、靈の探求者の研究の成果に関心を抱く人びととのあいだに築かれる関係をより正しくとらえることが重要である」と考えています。私は、このような観点に立って発表から十年後に改訂をほどこすことによって、本書をよりよいものにするのができたと思っています。

この第一部には、第二部が続く予定になっています。

この第二部で、私は、人間を高次の世界の体験へと導く魂の状態についてさらに記述するつもりです。

本書のこの新しい版の印刷ができあがったとき、人類がいま体験している大きな戦争が勃発しました。私の魂はこのような運命的な出来事に深くゆり動かされているので、この点についても言及しないではいけないのです。

ベルリン一九一四年九月七日

ルドルフ・シュタイナー

一九一八年版に寄せる序文

新たな改訂をほどこすにあたって、私は、今回の新しい版の内容に関しては、ごくわずかな変更をほどこすだけで十分である、と考えました。そのかわり今回の版では、「あとがき」をつけ加えることにしました。私はこの「あとがき」で、魂に関する基礎的な事柄について、いままで以上に明確に述べるように努めました。本書をお読みになる方が誤解しないで本書に書かれている内容を受け入れるようになるためには、本書の記述は、どうしてもこのような魂に関する基礎的な事柄をよりどころとしなくてはならないのです。私はこの「あとがき」の内容は、アントロポゾフィー（人智学）的な霊学に敵対する多くの人びとに対して、「このような人びとは、アントロポゾフィー的な霊学の本質を正しくとらえない

で、それを実際とはまったく別のものとイメージすることによってのみ、自分の主張を貫いている」という事実を明らかにするのにふさわしいものと考えています。

一九一八年五月

ルドルフ・シュタイナー